

四谷の

千枚田だより



第198号

四谷の千枚田

秀峰鞍掛山(八百八十三㍎)の南西斜面に広がる棚田。

この棚田は「四谷の千枚田」と呼ばれ、地域の宝として親しまれ、また、都市近郊からは多様性に富んだ棚田に癒しを求め、年間二万人を超す人気スポットになっている。

場所は愛知県新城市四谷地内に位置し、海拔二百三十㍎から四百三十㍎と高低差二百㍎、勾配六分の一と急峻で日本三大石積棚田と評されている。

観る目は圧巻であるが、ここを耕す耕作者は折り重なる石積み的小さな田んぼに大きな難儀を強いられながらも、根強く頑張っている。特徴は鞍掛山に降り注いだ雨が地中深く浸透、湧き水となり棚田全部を潤している。耕作者は鞍掛山の恵まれた湧き水で旨いお米を作ろうと、全戸が稲架かけを行い「湧き水、天日干し、これ以上贅沢な米がどこにあるだん…」と自慢気だ。

最近では化学肥料に捉われず干

草を多くすき込み、作り土の改善から、より一層の旨い米作りを試みたり、農薬の乱用から減少傾向にあった動物(両性爬虫類や鳥類など)の再生から「生きもの」と共生した体にやさしい米づくりの実践等々、棚田すべてをビオトープと位置付け、この地に合った小粒であるが喉ごしの食感ほ他に類がないとも謳われる「まぼろしの米」「ミネアサヒ」を栽培、より一層の美味しい米づくりに精を出している。

四谷の千枚田の現状

- 耕作面積 3.6㍎
- 耕作枚数 約400枚
- 一戸当たり耕作面積 約12㍎
- 一戸当たり耕作枚数 約15枚
- 一枚当たりの大きさ 約0.9㍎
- 品 種 ミネアサヒ
- 耕作者 26名
- 特 徴 湧き水天日干し
- 日本三大石積棚田 斜度 1/6

かつては千二百九十六枚の田

んぼが耕されていたが、昭和四十六年の減反政策と経済成長の煽りから平成初頭には三百七十三枚までに減少した経緯がある。

昭和三十年代には化学工業の副産物から化学肥料、農薬が増産され、野山の草刈り場はお役御免となり、植林奨励がなされ、山という山は何処もかしこも杉やヒノキの森林と化した。

最高値を示していた当時(昭和四十六年)は鞍掛山の植林された針葉樹杉・ヒノキもまだまだ幼木で、水源に湧き出る水量も豊富であったが、木材の需要の低迷から森林管理が疎かになり、現在、湯水期の二月では秒間七㍎程度まで減少している。当時は秒間二十㍎、枚数で千二百九十六枚が潤っていた訳であることから最高値当時を比較すると、現在耕されている田んぼが三分の一、水量も三分の一に減少しており、田んぼの数と水量のバランスが何とか保たれ、水騒動も起きないことから、現状維持の保存が望ましい。

保存活動

生物多様性、自然に恵まれた四谷の千枚田では環境学習、稲作体験学習、市内外児童の校外学習や社員研修の受入れなど、を積極的に実施。

コミュニティ

毎年、六月第一土曜日にはお田植感謝の夕べ」と銘打って千枚田の沿道沿いに千五百本のロウソクを灯し、田植への労と、地域の絆を図る催しを実施。十二月の第二日曜日には収穫感謝祭を実施。搗き立ての餅や有害獣イノシシの資源有効活用とした「しし汁」を振舞うなど、地域ぐるみの活動にいとまがない。

継続は力なり

第六回「ディスプレイ農山漁村(むら)の宝」選定地区結果公表

18

鞍掛山麓千枚田保存会

— くだびれたらおいでん癒やされるに —



農林水産省ホームページより

コミュニティ部門

環境保全・景観保全

企業との連携

教育機関との連携



所在地: 愛知県新城市

概要

- 自然豊かな景観と生物多様性に富んだ「四谷の千枚田」は、H22年に名古屋で開催された生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)の誘致に貢献。
- 地域の教育機関と連携した農業体験学習や、企業と連携した社員研修・ボランティア活動を積極的に受け入れ。

成果

- 棚田の見学・訪問者は、1.5万人から2.5万人に増加(H26~H30)。
- COP10を機に、ベトナム、中国など海外から中山間地の米作りに関する農業視察が増加。

連谷明朗クラブ研修旅行

二月十三日、連谷明朗クラブ(夏目宏一会長)は参加者二十五人を得て、西尾市みかわ温泉「海遊亭」を会場に恒例の日帰り研修旅行を盛大にかつ有意義に楽しんだ。

午前中は桐龍座恋川劇団の涙あり、笑いありの大衆演劇を堪能した。昼食は豪華な海鮮料理に舌鼓。ほろ酔い酒も、次第に量を増し、三河弁でしゃべる声も大きくなったり、八十(歳)にもなる爺が「若いおなご(七十五歳?は超している)に舞台へ引つ張り上げられ、踊れもしないダンスを強いられたり、歌ったり、笑い転げたり、それは、それは楽しいひと時を過ごした。

帰路は定番の海鮮問屋「やますい」でバカ沢山のお土産を買い、何処へ配りやあいいずらかのん…、と思案顔。「やますい」を過ぎると毎年、(舜)が一年の出来事などを会員にお伝えすることになっており、今回は「むらの宝」受賞式が首相官邸で行われ安倍首相、菅官房長官、江藤農林水産大臣、北村地方創生相などのお偉い方々とお話できたことを報告。話すマイクが割れ、どっちみち聴く人は少ないと判断、話は早い目に終わり、ビンゴで締めくくった。

農業振興技術連盟地方セミナー

一月三十一日、中電大ホールを会場に令和元年度農業農村工学会京都支部講習会・研修及び農業農村整備地方セミナー(北陸東海近畿プロジェクト)の同時開催により、「国土強靱化に向けた防災・減災の取り組み及び東海地域における地域活性化の取組」と題して農業農村工学会京都支部・全国農村振興技術連盟の主催により開催された。

近年、自然災害が頻発化しており、このような中、農業農村整備事業として、農村地域における国土強靱化に向けた防災・減災の取組は喫緊の課題として、その対策を図っている。一方で、農村地域では、人口減少や過疎化・高齢化等に伴い、その活力が減退している状況のなか、各地でその地域独自の強みを活かした地域活性化や地域振興の取組が進められている。

講演は、表題について学識経験者、地域リーダー、行政関係者等の多様な講師により、参加者の地域における取組みに役立つ幅広い情報の提供を目的に行われた。

講演の概要 小山舜二
「むらの宝」〜地域活性化に向けた

取り組み」と題して二十九年間「四谷の千枚田」を地域の宝として、耕作者は勿論、連谷地区の住民、また、応援していただいている多くの皆さんを交えた保存継承活動、また、地域の中核とした役割の創生から、唯一無二の財産を得られたことは誇りに思うし、今回、第六回「ディスカバー農山漁村(むら)の宝」に応募、コミュニケーション部門に選定受賞したことは、まさに、これに勝る宝はないと、熱く語り、大勢からあたたかい拍手をいただいた。

ヤマアカガエル

昨年から現在までの気候変化を独断と偏見で纏めてみた。

まず、昨年末まで紅葉が続き、年を明けてからも暖冬傾向で推移、例年のような季節変動がみられず、冬を飛び越し、春、到来の感がした。

これでは自然が狂うと予感。ヤマアカガエルで検証してみた。同種は春の一番先の雨で最初の産卵、次の雨で産卵と、雨毎に産卵される種で、

今年のように冬の条件(低水温を満たさない場合はどうなるか興味深々、暗視カメラを設置するなど観察を行った。

結果、第一回は一月二十六日の雨の朝に一卵塊を、二回目は一月二十九日の雨の朝に十二卵塊を三回目は二月十四日に一卵塊が、同十六日の雨の日は産卵がなかった。

考察すると暖かい冬であった(スタットレスタイヤ無使用)が、最低気温氷点下四℃から二℃をキープした寒い日が時々あったことが、自然界の生きものたちに冬の条件としての刺激を与えたものと推察した。

理事会

二月十五日、定例理事会を実施、令和元年度の事業の進捗状況、来期の事業予定などを確認した。

今後の予定

- ・三月三日、名古屋大学大学院香坂教授・オーストラリア研究者棚田の活用、制度の調査訪問
- ・三月十二日、愛知県国際課、オーストラリア・ビクトリア州の行政調査(文化財)の対応

行 令和二年三月一日
鞍掛山麓千枚田保存会
発 文 責 小山舜二

